

# ときめき、育てる。

# 17歳新聞

2014  
10月

[第15号]

## 編集新聞局員

責任者 第15号編集長 小倉 幸恵  
顧問教諭代表 榎木 淳  
編集者 池田 くるみ 高橋 麻莉  
齊藤 愛莉 宇佐美 舞  
葛西 愛理 章 美綺  
大丸 音々 谷口 志帆

## 取材協力



JR HOKKAIDO HOTELS  
JRタワーホテル日航札幌  
nikko hotels international  
www.jrhotels.co.jp/tower/

プロにおハナシ聞いちゃいます!  
おしえて  
シゴト人



絵本作家・イラストレーター  
そらさん

札幌市出身。北海道を拠点に活動する。JR北海道ICカード乗車券「Kitaca」のキャラクター「エゾモモンガ」や北海道観光PRキャラクター「キュンちゃん」をはじめ、花王「ニベアクリーム」の2014年限定缶デザインなどを手がける。現在、NHK札幌放送局「つながる@きたカフェ」～ほっかいどう街角さんぽ～に出演中。子どものころから、空を見上げて流れる雲を見ているのが好きだったことが「そら」という名前の由来。



▲12年前からライフワークとして、子どもたちへ「絵本の読み聞かせ」をしているそらさん。



キュンちゃん

▲「キュンちゃん」はエゾナキウサギ。冬眠はしないよ!

キャラクター作りは最初の「ひらめき」を大事にしている。急に湧きたつものが一番よいことが多く、「ふ」と思い浮んで描き上げている。平成23年に誕生した「キュンちゃん」もそうだった。「キャラクターは北海道の動物」という要望を電話で受けながら描いているうちに、ほとんどができ上がったという。名前の由来は見るもの・触れるものの気持ちに「キュン」と感動させること。カニや牛などの「かぶりもの」をした『ご当地キュンちゃん』もいる。地元を応援したい気持ちを込めて描いたそうだ。



▲人気者の「エゾモモンガ」。たくさんのグッズも販売されている。

インスピレーションが一番  
JRで通学する人には馴染みの「エゾモモンガ」。平成20年のJR北海道IC乗車券の導入にあわせて、その前年に誕生した。そらさんが北海道を代表するイラストレーターとなるきっかけとなった作品ともいえる。



▲エゾモモンガが飛び交う「Kitacaルーム」。心が和むプレゼントが用意されている。隠れモモンガを探すのも楽しい♪

## 親の思い

「キャラクターは安易に産み出せばいいわけではない。しっかりと育てていきたい」。そう思うそらさんは、JRタワーホテル日航札幌の開業10周年を記念して、平成25年に「Kitacaルーム」をプロデュースした。「親」ならではのアイデアが満載された大人の気の部屋になっている。

たくさんキャラクターたちは、まさしくそらさんそのもの。心にキュンときめく、やさしくて癒されるものはかりである。

## 色鉛筆のお花から

物心の付き始めた3歳のとき、父親が色鉛筆で「花の絵」を描いてくれた。真っ白な紙が本物の花を撮った写真のようになったことに感動した。そのときの記憶が鮮明に残っているという。「人の手はゼロからものをつくることができる」と思い、3歳ですでに「絵描き」になりたいと思った。そらさんの作品には動物が多い。「子どものころから動物好き。自然の中や動物といるとリラックスできるし、動物とは何も言わなくても分かり合える気がする」と笑顔で話す。元気の源は愛犬の「ホリー」。耳のおいと肉球とおもしろい動きに癒されている。

## 画材から広がる可能性

そらさんの作品はタッチの幅が広い。パノンのなかで描く絵もあれば、アクリル画もある。鉛筆画とインク画と水彩画が混ざった絵も描くので、何人もが描いているような感覚になる。そのため「仕事の幅が広がった」という。「画材を知ることが可能性を知ること」。そう感じながら仕事をしている。

絵は独学で学び、19歳のころからイラストレーターとして絵の仕事に本格的に始めた。最初の10年は自分の好きな絵を描くことができずに苦しかった。「自分の絵には最後は『自分らしさ』がにじみ出るもの。私の描く絵は顔がどれも『ゆるい』って気づいたの。だから、最初から『とがる』必要はないって思ったら、気持ち楽になった」という。自分がしたいことをPRしていくうちに、徐々に認められ「好きなように描いていい」と言われるようになった。自分の見せ方や売り込み方も大切だ。「年々、絵を描くことが楽しくなっていく」と充実している。今では絵本作家はもちろん、画家としても活動の幅を広げながら活躍している。



▲平成25年、画家としてライブペインティングをするそらさん。

2014年 12/8~13 (月) (土)  
第26回 札幌大谷高等学校美術科卒業制作展  
第5回 中高合同美術展 3+3=∞/infinity展  
会場:時計台ギャラリー(北1西3)  
2015年 1/26 (月)  
第25回 札幌大谷高等学校音楽科卒業演奏会  
会場:札幌大谷大学 大谷記念ホール(北16東9)

「新聞? 見てるよ、テレビ欄。」そんな人も、新聞局「17歳新聞」つくりたい生徒募集!  
バックナンバーは学校ホームページの「新聞局クラブ紹介」に掲載しています。

もっと詳しく知りたい! そう思ったあなたは、こちらにアクセス!

そらさん <http://sora-office.com/>  
Kitaca <http://www.jrhokkaido.co.jp/kitaca/>  
キュンちゃん [http://www.visit-hokkaido.jp/t/kyuns\\_room/](http://www.visit-hokkaido.jp/t/kyuns_room/)

楽しいブログやイベント情報も



経験が成長の源

イラストレーターの仕事を始めたころ、必要な画材を買うためにさまざまなアルバイトをした。パーティーをしながら、オリジナルの12星座カクテルを作り、メニューもアルバイト以外の時間で手描きのイラストを作り、その喫茶店の部門の売り上げを10倍に伸ばしたこともあった。その後チームに昇格するなど、どの仕事でも常に100%以上をめざすことを心がけた。冬には宅配便の仕事をして、体力やめげない力もつけた。この経験が札幌地区トラック協会の絵本「ランデーシリーズ」に生きている。

どの仕事も遅刻や無断欠勤をするとクビになるので、熱が出ても休めない。「最初は泣いた。つらかったからね。でも、やりきって本当に良かった。私の自信になっている」。アルバイトはコミュニケーションをとるために大切なものであり、絵に行き詰まったときの抜け道にもなったそうだ。

ほかにも、キャンペンガールや料理教室の先生をした。ここでは、アルバイトでも「円満退社」が秘訣であることを学んだ。何かを終えるときも心の持ち方の違いで、次の自分につなげることができ、周りの人は応援してくれるという。

もともとは画材を買うためのアルバイト。しかし、それはいつの間にか社会勉強の環になつていった。



▲JRタワーホテル日航札幌36階にある絵画「祝福」の前に立つと、ひだまりのような温かな気持ちにまつまれる。

人柄をシゴトに

そらさんの仕事は絵を描くだけではない。自身が制作したぬいぐるみを撮影したピクチャーブックでは「素敵なメッセージ」を贈り、子どもたちとのライブペイントでは「絵を描く楽しさ」を伝えている。テレビ出演では番組制作者側にも立ち、スタッフの意見を尊重しながら、自分の意見もきちんと伝え、視聴者の目線に立ったよい番組をつくる努力をしている。スタッフや街の人たちへの気遣いも忘れない。「アルバイトで接客業をたくさんしてきてきたから身についたことかな」と、ここでも人生経験が生かされている。



▲「おべんとぼこヒーロー」のHERO。チャリティーグッズのデザインに。

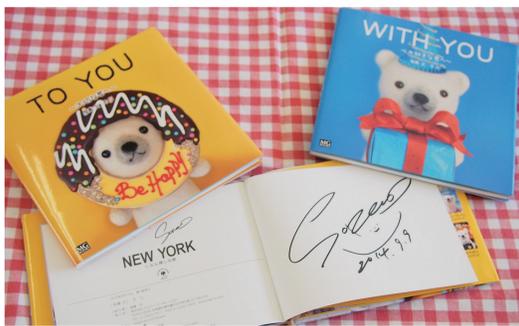
巡りめぐって

多彩な活動のほかにも、チャリティーに力を入れている。お金の使い方やチャリティーのノウハウは、ラルフローレン株式会社代表取締役社長のエドワード・コールさんから教わった。「誰かにすることは地球を回って必ず自分に返ってくる。チャリティーは誰かのためにやるのではなく『お礼』なのだ」というエドワードさんの言葉に影響を受けた。

そらさんは「自分の幸せが、少しでも誰かの幸せになればいい」という気持ちで活動する。チャリティーに不慣れはあっても、間違いはない。自分ができることを自分なりに考え、続けることが大事であることを学んだ。

穏やかな心と時間

「北海道を絵本大国にしたい。絵本のような空想する世界の楽しさを伝えたい」という思いがあり、絵本の読み聞かせをしている。「子どもたちは目をキラキラさせて見てくれる。楽しすぎだよ」と話すそらさんの目がキラキラと輝いていた。「暑いところでは音楽家、寒いところでは芸術家が生まれやすい。寒いと家で空想する時間が多いからかな。北海道には穏やかな時間が流れていて自分に合う」と道産子の幸せを感じている。「理想は好きな絵を描き続け、お団子をのどに詰まらせ、ゴホゴホと咳き込むおばあちゃんになりたい」。そらさんの笑顔に穏やかな未来が重なるように見えた。



▲ピクチャーブックも人気。しろくまくん&くろくまくんの会話に、心がホッとすること間違いなし。

涙だってステキな作品に

悩んだときは尊敬できる人たちが話を聞き、自伝的な映画からも自分にプラスになることを吸収した。「なりたいたものが決まったら、それに向かっ『いま何をしているか』が言えないと無理」と言われ、気持ちが前に向いたこともあった。「経験はすべて自分の財産。涙も全部作品になる」という。「どんな環境や境遇でも、絶対に幸せな方向に向かっているから大丈夫と思って進んでほしい」と高校生にエールをくれた。

あしがき

新聞局員がそらさんに初めてお会いしたのは、平成25年3月の宮城県被災地取材のときでした。UHB「U型ライブ」のキャスター大村正樹さんとそらさんのチャリティーで取材をさせていただき、一緒に現地を歩きました。同年6月に開催した「被災地を忘れない『パネル展』」にも、お忙しいなか「来場いただき、心が温まるメッセージをくださいました」。

今回の取材にも快く応じてくださり、手がけたキャラクターグッズやサインのほか、美術科の局員のために画材のプレゼントも準備してくださいました。とても気さくで優しい人柄に触れ、幸せな気持ちになりました。

北海道を代表する芸術家のそらさんは、思いやりと地元愛にあふれた素敵な方でした。これからも、子どもたちの心と感性を育てる活動や、たくさんの方が幸せになれるような作品を楽しみにしています。

そらさんをはじめ、取材場所と写真を提供してくださったJRタワーホテル日航札幌の皆さま、キャラクター使用を許可してくださった関係者の皆さま、ありがとうございました。



祝・全国大会出場  
入賞報告

この夏、水泳・卓球・陸上競技・フェンシング・弁論部が全国大会に出場しました。全国高校総体で入賞したクラブを紹介しします。

3年生の土田さん、ベスト4に！

フェンシング部の土田二葉さんが女子個人人工で4位入賞。「コーチと顧問の先生に恩返しをしたい」と試合に臨んだ。惜しくも決勝進出は逃したものの、ラスト3秒でも諦めずに1本をとり、攻める気持ちで大健闘した。



▲3年連続全国大会出場を果たした土田さん。

全員卓球で、ベスト8進出！

「全員卓球」をスローガンに日々練習に励む卓球部。準々決勝で今大会優勝校の四天王寺（大阪）と対戦。王者を相手に互角のラリーで大熱戦を繰り広げ、ベンチと選手が一体となった試合に会場が沸いた。10月の長崎国体の北海道代表レギュラー3名はすべて「札幌大谷」から選ばれている。「北海道から金メダル」という目標を達成してほしい。



▲ベンチと一緒に喜ぶ高原さん。(写真提供：月刊「卓球王国」)

がんばる部員に聞いてみよう！  
ポイントビュー

奈良歩香



ソフトテニス部主将、高校2年生。昨年、自身初の全道大会に出場し、今年9月の全道新人戦で個人ベスト32入り。来年2月の団体戦も全道大会出場を決めている。現在、成長が著しい選手のひとりである。

仲間に恵まれて

小3のとき、兄がソフトテニスをやっていたことがきっかけで始めた。最初は楽しいだけだったが、1年が経って勝負欲に目覚めていった。初めての全道大会では緊張で試合内容は覚えていないが「仲間の支え」は覚えていてという。奈良さんにとって、仲間とは「苦しいときに相談し合える存在」という。仲間に恵まれていること、顧問の先生の指導に感謝している。「大谷は自分の力を伸ばしてくれる楽しいところ。ぜひ入部してほしい」と話す。

目標と夢

今後の目標は団体で全道ベスト8に入り、個人の順位も上げること。錦織圭選手の活躍で、テニス注目されている。そのチームに乗り「ソフトテニスもたくさんの人に知ってもらいたい」と、オリンピック種目になることを夢見ている。将来の夢は保育士になること。「子どもの笑顔が好き」と笑顔で話す奈良さんは、未来を育てる仕事に向いていると感じた。

オオタニ高校のせんせいたちをご紹介。  
15 せんせいずかん

リカ科ザツガクオタク類  
フクモト セイゴ

- ▶ 生息地 サツエキ付近の家電屋
- ▶ 特技 居合い斬り(六段)
- ▶ 類似注意 ゴリラ
- ▶ 元気の源 アルコール(泡盛)

